

# 『沙石集』の一考察

笹田教彰

〔抄録〕

鎌倉時代の後半、無住一円によつて撰述された『沙石集』は、中世の信心の世界を、多角的にとらえている史料として従来から注目されてきている。ただし、当初の五巻から十巻へと増補されたと見られ、また無住の手により約二十五年に渡つて改訂がなされ続けた結果、現在、各巻の構成や収録説話数を異にする伝本が数多く残されている。本論文は『沙石集』を平安時代中期以降における仏教思想、とりわけ浄土教思想の受容の実態を看取できる史料として位置づけ、古体を残していると考えられる十巻十二帖

本と十巻十帖本、さらに江戸期の流布本である十巻十帖本を比較検討しつつ、無住の往生思想の特色を究明することが骨子である。またそのことにより、鎌倉時代における仏教界の動向を把握すると同時に、法然や親鸞・一遍など、後世に大きく発展する教団の祖師たちについても、祖師顕彰という教団の立場を離れて仏教界全体のなかでの再評価が可能であると考える。

キーワード 『沙石集』、無住、臨終正念、発心・遁世、往生浄土

## 一、問題の所在

末代には、多くは往生とのみ云ひ合へり。悪人の中に、往生する人の事、是は人、是を見て、悪人も往生す。悪業恐るべからずと云ふ。是により、末代には魔往生あるべしと云へり。悪人なれども、心を改めて、十念をも唱へ、宿善開發して、誠の往生もある

べし。宿善なく、正念にも住せず、誠なき物のことごとしき往生は、怪しむべし。心を翻して往生せんには、教門の許す所なり。悪人と云ふべからず。善人も妄念ありて、臨終悪しきことあるべし。これまた、善の由なきにあらず、妄念の強きなり。この理を信じて、因果を乱すべからず<sup>1</sup>。

これは十二帖本『沙石集』（市立米沢図書館蔵・小学館『新編日本

古典文学全集』底本、以下米沢本と呼称する）巻第十の十「妄執に依りて魔道に落つる人の事」中の一節である。『沙石集』の撰者無住の在世当り「悪人も往生す。悪業恐るべからず。」という言葉がしきりに行われていたことが窺えるが、これに対する無住の主張は以下の二点にまとめられる。(a) 悪道に墮すべき人間が往生するためには「心を改め」「十念をも唱へ」「宿善開発」する必要があり、それがその経典（たとえば『観無量寿経』下品下生段など）にも示されている往生のありようであること、従ってそのような要件を満たしていない悪人の往生は疑わしいということ。(b) 一方で、たとえ悪業を犯さず善根を積んでいても臨終に妄念があれば往生することはできない。ただしこれは臨終時の心の問題であって平生積まねばならない善根が無意味なわけではないということ。なお、最後に「因果を乱すべからず。」と明記しているように、往生の得否に関する無住の基本的な考え方は「善因善果・悪因悪果」にあつたと言えよう。

周知のように、近年の研究では法然や親鸞が説いた「悪人正機」説は、当時それほど広がりを見せておらず、ここに引用した無住の言説にも窺えるように、悪人が心を翻して往生することは広く顕密仏教が説くところであつたということが見直されてきている<sup>②</sup>。実際、法然の立場は「罪は十悪・五逆のものむまると信じて、少罪もおおかさじとおもふべし。」<sup>③</sup>という言葉に象徴されていると言え「悪業恐るべからず」といった破戒行為を助長することなどまったくなかったことは明白である。鎌倉新仏教中心史観とも言える従来の研究視座が見直されている昨今、無住に代表される顕密仏教側の見解は、むしろ鎌倉時代

仏教界の大勢であつたとも考えられ、中世初頭における仏教界の動向を捉えなおす中で、法然や親鸞の思想的革新性も再評価される必要に迫られていると言えよう。

ところで、無住が撰述した『沙石集』は、鎌倉時代の仏教界の動向や仏教思想の受容の特色を窺うことのできる貴重な作品として従来から注目されており研究も多い<sup>④</sup>。なかでも近年の成果としては大隈和雄氏の研究成果が注目されよう<sup>⑤</sup>。撰者無住について大隈氏は「同時代の仏教の動向に強い関心をもちながら、一宗一派の主張にとらわれることなく、庶民への語りかけをつづける立場を守り通した例は他にないのではないだろうか。中世の信心の世界を、無住ほど多角的にとらえることのできた人物を、ほかに探すことはできないように思う。」<sup>⑥</sup>と述べておられる。『沙石集』の単なる作品論に留まることなく、中世の信仰世界全体のなかでの位置づけをなされている点、首肯すべきであるが、私は平安時代中期以降、鎌倉時代にかけての浄土教を含む仏教思想受容の実態を探索する上でも『沙石集』の内容は注意すべきであると考えている。というのも『沙石集』巻第一の序文は「それ鹿言軟語みな第一義に帰し、治生産業しかしながら実相にそむかず。然れば狂言綺語のあだなる戯れを縁として、仏乗の妙なる道を知らしめ、世間浅近の賤きことを譬として、勝義の深き理に入れしめんと思う。」<sup>⑦</sup>と書き始められており、「かの金を求むる者は沙を捨ててこれをと、玉を瑩く類は石を破りてこれを拾ふ。仍て沙石集となづく。」<sup>⑧</sup>という書名の由来が述べられている。

つまり、無住が「仏乗の妙なる道を知らしめ、(中略)勝義の深き

理に入れしめん」がため、集められている「狂言綺語のあだなる戯れ」沙」や「世間浅近の賤きこと」石」にこそ、無住在世当時、関心の高かった仏教界の動向に関する事柄が収集されていると見ることが出来るからである。もちろん無住の意図は「金・玉」を得て欲しいとの思いにあるが、冒頭に引用した悪人往生の問題や巻第一を中心にしてべられる神仏習合思想の展開、あるいは和歌陀羅尼観の提示や儒教的徳目の仏教思想との融合など、日本で定着していく仏教のありようが、『沙石集』全編を通じて、まさに見て取れるように思われるのである。大隈氏は「仏教革新の運動の波が引いたあと、無住は、仏法の現実を見据え、仏法がいかにあるべきかを考えつづけたが、無住が提起した問題は、近代の仏教史研究の中ではとり上げられないままになっている<sup>9)</sup>。」と述べておられるが、本稿では『沙石集』において無住が提起している問題のうち、往生思想（臨終観）に焦点をあて『沙石集』の構造および無住の思想をまず明らかにしていきたい。その上で、法然・親鸞・一遍など後世大きく発展していく教団の祖師たちを含め、鎌倉時代の仏教界全体の動向に留意しつつ、日本における仏教思想受容の特色について探っていきたい。

## 二、『沙石集』の伝本について

『沙石集』を研究対象とする場合、まず言及しておくべきことは、数多く残されている伝本とその分類についてである。弘安二年（一二七九）から開始された『沙石集』の編纂は、翌年に一旦五巻までが完

成したと見られているが、その後増補がなされ、弘安六年（一二八三）に十巻本としてまとめられたようである（米沢本巻第十末「述懐事」および識語）。ただし無住はその後も加筆・削除等の改定作業を続け、最後に改訂されたのは、神宮文庫所蔵本（以下、神宮文庫本と呼称する）巻第四末の奥書により徳治三年（一一三〇八）にまで及んでいることが窺える<sup>10)</sup>。また現存する諸本は、古くは渡辺綱也氏により収録説話数の違いにより「広本系」と「略本系」に大別され、「広本系」諸本は「最初に公にした書の形」を留めているのではないかとされる十巻十二帖本と十巻十帖本に分類され、さらにいくつかの系統に分類されてきた<sup>11)</sup>。しかしながら近年、小島孝之氏は、広本から略本へ改編・簡略化されたものであるという見通しの前提となる「説話数の多寡というのには必ずしも適切な分類基準とはなしたがたいところがある」と指摘され、『沙石集』の成立に比重を置いた「古本系」（第一類十二帖本と第二類十帖本に分類）と「流布本系」（第三類十帖本と第四類五帖本に分類）という新たな分類方法を提示されている<sup>12)</sup>。ただし渡辺綱也氏の「広本系」（小島孝之氏の「古本系」）に分類されている伝本も、十二帖本と十帖本では巻六以降の構成や収録説話数を異にしており、さらに「略本系」（小島孝之氏の「流布本系」）諸本には改訂年次を知ることのできる裏書を有するいくつかの写本類と江戸期の古活字本および整版本が数多く存在しているのである。

このように『沙石集』には成立の経緯を異にする多様な伝本が現存しており「その系統的整理は難渋をきわめる<sup>13)</sup>」のは事実であろう。ただし作品論を主眼とするのであれば、伝本の分類や系統分け、収録話

数の異なりや説話配列の異同、巻ごとの主題ないし方向性等々の究明は重要な課題となろうが、当時の仏教界の動向や無住自身の思想内容を検討しようとする本稿では、『沙石集』を通して看取できる無住の基本的な仏教理解や主張が一体どこにあるのかという点に焦点をあてたい。大隈和雄氏は「経論を典拠としない説法を、聞き手に信じさせるためには、それが実際に起こった、疑う余地のない確かなことなのだということをも、くり返し言わなければならなかった。」と述べておられるが、当然根拠となる事例は加筆されることもあり、一方主題が見えにくくなるような場合は削除されることとなる。また本文はほぼ同様であっても、文章の挿入や字句の修正等の事例は枚挙に暇がない。従って問題は収録説話数の多寡よりも無住が各巻の各条で何を主張したかったのかということになろう。

たとえば冒頭に引用した一節は、「妄執に依りて魔道に落つる人の事」として記されている主題の内容を補充するものとして位置づけられていると考えられるが、『沙石集』編纂当時から約二十五年後の改定を経た姿を留める神宮文庫本では以下のように記されている。

末代ハ多ハ往生トノミ云アヘリ。悪人ノ中ニ稀レニ臨終オタシケレハ、見レテ悪人モ臨終好シ、悪業オソルヘラカスト云フ見ヲ

起テ、罪ヲ恐レス、恣ニ三悪四趣ノ業ヲノミ成事世ニ多シ。濁世ニハ多魔往生アルヘシト云ヘリ。悪人ナレトモ、心ヲ改メテ、十念成就シ宿善開發シタラムハ誠ニ往生スベシ。宿善モナク、正念ニモ住セサラム人ノ事ノシク往生ストノミ申アエラム難シ心得。悪人モ心ヲ翻シテ往生セムハ教門ノユルス処也。悪人ト云ヘ

カラス。善人モ妄念有テ臨終悪キ事有ヘシ。是又善業ノ悪キニアラス。妄念ノツヨク善業ハ弱キ故也。此理ヲ信シテ因果ヲ乱スヘカラス。<sup>15</sup>

傍線を施した部分に加筆・修正が認められよう。後述するように、この条全体の構成は米沢本と同じであり、本文全体では大きな加筆・修正は認められない。つまり無住の「悪人往生」に関する基本的な考え方は『沙石集』の改訂作業とは関係なく、編纂当初から大きく変化していないということがまず指摘できよう。その上で前半部分を見てみると米沢本では「往生」と記されていた部分が神宮文庫本では「臨終」へ訂正されていることが窺える。「悪人ノ中ニ稀レニ臨終オタシケレハ」「悪人モ臨終好シ」「善人モ妄念有テ臨終悪キ事」というように、善人であれ悪人であれ、往生の得否を論ずるということは、まさに臨終が穏やかであったか否かという「臨終の善し悪し」を論ずることである、という考え方がより鮮明になっているのである。往生の得否の問題が、結局は臨終の善し悪しにかかっているという無住の考え方は『沙石集』全体を通じて窺える往生思想を検討する上でも、さらには当事の仏教界の動向を知る上でも重要な論点であると考えられよう。

もちろん、往生の有様をめぐる説話はこの箇所だけではなく、巻一や巻四にも収録されており、無住の思想を検討する場合には、巻ごとの主題や方向性を探りつつ、『沙石集』全体のなかで関連する主題（を持つ説話）がどのように呼応しながら配置されているのか、またそれは『沙石集』の度重なる改訂作業を経て変化しなかったかどうか

かを確認しておく必要があると言えらる。その上で無住の思想の特色がどこにあったのかを検証していくことになる。

そこで本稿では『沙石集』現存諸本の内、最も古体を残すと考えられている十卷十二帖本を用いることにしたい。ただし最も古い書写年代を原識語に有する北野克氏所蔵元應三年（一二三二）奥書本は巻三・巻四を欠いているため、十二帖本唯一の完本であり小島孝之氏により翻刻された米沢本を用いることにしたい。また、記述内容については、十卷十帖本で最古の書写年代を有する御茶ノ水図書館蔵本（岩波書店『日本古典文学大系』底本、以下、梵舜本と呼称する）と、「流布本」（略本系）諸本の中では書写年代が古く完本であり、『沙石集』に対する最後の訂正がなされた本文を有すると考えられる神宮文庫本を比較参照することにした。

### 三、『沙石集』巻第十の構造と特色

『沙石集』では各巻の目次（本編の小見出し）に示された内容の説話がまず記されたあと、関連する説話や仏典・漢籍からの引用、無住のコメント等が付け加えられ一つの条を構成しているといえる。本稿の冒頭に引用した一節を含む巻第十本ノ十「妄執に依りて魔道に落つる人の事」の内容をまず確認しておきたい。本条は、才覚に優れ賢者・道心者との世評も高かった「某の宰相」が、妄執によって往生できず、魔道に堕ちてしまったことから説き始められている。「某の宰相」は平生からの願い通り「正しき最後の十念をば、いかに心を澄ま

して唱へ、第十の念仏一反をば、殊に声を打ち上げて、思ひ入れてのびのびと申して」臨終を向え、同法の僧たちにも「御臨終目出かりしかば、御往生とこそ、心安く」思われていたのである。しかしながら宰相は、「当世の御政事の濁れる事」に対する憂慮を「心の中ばかり、人知れず妄執忘れ難く」、結局往生できずに「由なき道」に堕ちてしまったのである<sup>16</sup>。無住は「世を捨て、深き山に住み、実の道に入るとも、妄念は捨て難きにこそ。まして塵勞の中にして、心清く執着を離るる事は、弥々難かるべきなり。」と述べ「されば臨終知り難き物なり。」と結んでいる<sup>17</sup>。

傍目には立派な往生とは見えていても、その心中は当事者しか分からないのであるから、往生したかどうかの判断は非常に難しいことを示す事例である。「臨終知り難き物」という厳しい現実を受けて無住は、この「某の宰相」の物語に続けて、往生が並大抵のことでは成就しがないことを示す事例をいくつも連ねていくのである。明遍僧都の弟子である真壁の敬仏房が、高野の聖人が人の臨終の良し悪しを言及することに對して「いさ、心の中をも知らぬぞ」と明言したということ記して、「実にと覚ゆ。」と述べている。また高野にいた昔の聖人が「弟子あれば、往生はせんずらむ。後世こそ恐ろしけれ」と語っていたことをあげ、臨終の様の善し悪しはありのままに伝え、悪しき死に様をしたのであれば、むしろ追善することこそが亡魂を助ける因縁になるとしている。

そしてこの一節に引き続いて、本稿冒頭に引用した「悪人往生」に関する一節があり、さらに高野の遁世聖たちが、「端座合掌し、念仏



唱へて引き入」つた僧侶の「すさまじげなる顔ざし」を目の当たりにして「魔道に入りぬ」と評定したこと。また別の高野の聖人が、遁世には三つの段階があると語っていたことをあげ、世を捨て、身を捨て、心を捨てる第三重こそが重要であるという内容を記している。第三重とは「五塵六欲、名聞利益、かつて心にかからず、執心執着無くして、浮世を夢のごとく思ひて、心の底まで清きを、心を捨てと云ふなり。かくてこそ、仏道に心は染み、菩提に望みは掛くべき事なり。」<sup>18</sup>ということであるが、当時は世を捨てる第一重すら難しい状況であるので、まして第三重は想像すらできないことである、と無住は結んでいる。そして本条の結論として以下のように記している。

名利を捨つるこそ、隱遁の姿、出家の形なれ。されば仏道に思ひ入らば、この心を捨て、まめやかに遁るべし。然るに、鈍なる者は、財と色を愛し、利なる者は、名と見とに着す。この故に、或いは世を捨てたる姿を、名聞にする人もあり。或いは徳を隠す由にて、放逸なるもあり。能く能く心行を察して、名利の穴を出て、執着の水を解くべし。<sup>19</sup>

本条冒頭に記されている「某の宰相」は傍目には分からない「妄執」により往生することができなかった。「臨終知り難き物なり」という無住の結論は、決定往生の要件となる臨終正念の成就は傍目では分からないということであり、姿かたちだけを整えるのではなく、心底名利の執着を解き放つことの重要性を述べているのである。無住にとって往生とは至難であるというのが基本的な認識であり、「悪人も往生す。悪業恐るべからず」などという言説は「摩往生」というべき、

到底受け入れられないものであったのである。

このように巻第十本の最終話である第十条は、臨終の妄執が往生を妨げるものの、それは傍目には容易にわからないことを説示する内容となっているが、それでは本条を含む巻第十全体はどのような構成となっているのであろうか。たとえば巻第十本の一「浄土房遁世の事」は伊豆山の浄土房の物語であるが、無住は「深く思い入りて、この世も身も惜しからず、とく浄土へ参らんと急ぐ心の誠ありけるにこそ。うらやましく、貴くぞ覚ゆる。遂に終り目出く往生したりとこそ、申し伝へたる。」<sup>20</sup>と結んでおり、「目出く往生」したと事例として注目しているのである。以下、本条では「五濁相應の法門、劣機応入の要略」である往生浄土の教行に関して、念仏門の行人は数多いが「誠ある人は少なく、並々なるは多し」と理想とすべき盧山の十八賢・増賀・恵心僧都源信の事例を述べ、浄土教思想の根幹として天親の浄土論や曇鸞の論註を持ち出している。しかしながら、当世の人は、往生極楽を受樂のために願ひ『浄土論』に説くごとき「度衆生」の心はほとんど稀で、「五欲のたのしみ、名利の執深くして、まめやかに世間を厭ひ、疎む心なく、病死憂患、種々の苦にあへども、なほ厭ふ心なし。僅かの楽しみに耽り、厭離の心なし。」と痛烈に批判している<sup>21</sup>のである。また当世の人々が他力本願ということを自分の心の良し悪しや善根の有無に関係なく、仏に頼みさえかければ往生できるように言い合っているが、それは誤りであること。また『観無量寿経』の下品下生段には、確かに十悪五逆の罪人が、臨終に善知識に会い、十念成就して往生することが説かれてはいるものの、それは宿善があつての

ことであると明言している。しかも「すでに教へに会ひ、知識に会ひながら、平生志薄く、臨終にもし苦患にも責められ、正念乱れば、三心もいかがとこそ覚ゆれ。(中略) 臨終に始めて実あらん事、大きに不定なり。」と、「十悪五逆の罪人」が往生することについて「全くさる人なかるべしとはあらず。」としながらも、否定的な考えを示しているのである。冒頭に引用した「悪人も往生す」という言動に対する批判的な立場と同様、無任の基本的な考え方を窺い知ることができると同時に顕密諸宗の容認する悪人往生さえ、よほどの特例であるという認識が伝わってくる点、注意しておきたい。そして「人の病重くして、正念も乱れ、臨終にのぞむには、日来能くし慣れ、思ひ慣れ、心に染みたる事、必ず現はる。(中略) 浄土房の志の如く、一念もこの身を惜しまず、世に心を留めずは、往生の素懐遂げん事、難からじ。」等々と本条を結んでいるのである。<sup>22)</sup> 浄土房のような志をもつた人物こそ往生を遂げることのできる、まさに理想の人物であったと言えよう。

古本系統に属する『沙石集』では、十二帖本・十帖本いずれも巻第十は本・末に分かれており、米沢本の巻第十本は、今引用した①「浄土房遁世の事」に始まり、②「吉野の執行遁世の事」、③「宋春房遁世の事」、④「俗士遁世の事」、⑤「観勝寺上人の事」、⑥「強盜法師道心の事」、⑦「悪を縁として発心の事」、⑧「証月房遁世の事」、⑨「迎講の事」、⑩「妄執に依て魔道に落つる人の事」、以上全十条より構成されている。「一期の栄花は久しからず。当来の快樂をこそ願ふべけれ」<sup>23)</sup>と発心・遁世し「臨終実に目出く、既に終わりにけり」と伝

えられた吉野の執行、「終り乱れず」<sup>24)</sup>と伝えられた宋春房、一門で遁世した丹後国の俗士、隠居して「二心なき貴き上人」<sup>25)</sup>と評された観勝寺上人など、浄土房と同じく理想とすべき発心・遁世の事例が集められている。ついで強盜という悪行を契機として発心・遁世した事例が続くが、⑦の内容は後世の「三人法師」を彷彿とさせ、その原形と考えられる。さらに「臨終目出くして終らにけり」<sup>26)</sup>と伝えられた証月房、「臨終正念の事を思ひ、聖衆来迎の儀」<sup>27)</sup>を願って始められた丹後国の迎講の事例が紹介され、先に引用した「妄執に依て魔道に落つる人の事」で閉じられている。浄土房と同じく「誠の心」を発した者が、臨終目出度く終わりと遂げたことをくり返し述べているのである。

巻第十ノ末は「靈託して仏法の物語したる事」、「諸宗旨を自得したる人の事」、「臨終の目出き人々の事」という構成になっている。前二条は無任の仏法観を検討する上で重要な内容を有しており、本稿の論点とも関連するが、紙数の都合上「真実に道心深くして、念々に道を行じ、欲の失を知り、妄念を薄くし、執着なからん人ぞ、道に入る初めなるべき。」<sup>28)</sup>という妄念・執着に対する戒めという、無任の基本的な立場が述べられている点を確認しておくに留めたい。そして『沙石集』の全体の終結部として、静遍僧都の弟子である行仙上人、建仁寺の門弟、寿福寺の老僧、栄西、栄朝、朗普長老、法心房、蘭溪、聖一和尚など、いずれも臨終目出度く終えた僧侶の事例が挙げられており、無任は『沙石集』を言わば往生伝で閉じているのである。日ごろから執着を離れ、臨終をいかに目出度く終わるかということが無任にとつて非常に重要なことであったことが窺えるのではないだろうか。

以上は十二帖本での構成であるが、巻第十について米沢本・梵舜本・神宮文庫本での構成は以下のようになっている。<sup>29)</sup>

- |                         |                         |              |
|-------------------------|-------------------------|--------------|
| 米沢本巻第十ノ本                | 梵舜本巻第十本                 | 神宮文庫本巻第九之始   |
| ①浄土房遁世の事                | ①浄土房遁世の事                | ①浄土房遁世之事     |
| ②吉野の執行遁世の事              | ②吉野執行遁世の事               | ②吉野執行遁世之事    |
| ③宗春房遁世の事                | ③宗春房遁世の事                |              |
| ④俗士遁世の事                 | ④俗士遁世シタル事               | ④俗士之遁世門之事    |
| ⑤観勝寺上人の事                | ⑤観勝寺上人の事                |              |
| ⑥強盗法師道心の事               | ⑥強盗法師道心アル事              | ⑥強盗法師之道心有事   |
| ⑦悪を縁として発心の事             | ⑦悪ヲ縁トシテ発心シタル事           | ⑦値悪縁発心事      |
|                         |                         | 神宮文庫本巻第九之終之始 |
| ⑧証月房遁世の事                | ⑧証月房久遁世の事               | ⑧証月坊上人之遁世事   |
| ⑨迎講の事                   | ⑨迎講事                    | ⑨迎講之事        |
| ⑩妄執に依て魔道に落つる人の事         | ⑩妄執ニヨリテ魔道ニ落タル事          | ⑩依妄執落魔道人事    |
|                         |                         | ⑪靈託仏法物語事     |
| 米沢本巻第十ノ末                | 梵舜本巻第十末                 | 神宮文庫本巻第十     |
| ⑪靈託して仏法の物語したる事          | ①靈ノ託シテ仏法ヲ意エタル事          |              |
| ⑫諸宗旨を自得したる人の事           | ②諸宗ノ旨ヲ自得シタル事            | ⑫得佛教之宗旨人事    |
| ⑬臨終目出き人々の事<br>(述懐の事を含む) | ③臨終目出き人々ノ事<br>(述懐の事を含む) | ⑬臨終目出度僧事     |
|                         |                         | ⑭述懐事         |

このように米沢本・梵舜本に存した③・⑤は神宮文庫本では削除され、巻十末の冒頭部分とあわせて巻九として構成されていることが窺えるが、総じて内容は大きく変化していないことが指摘できよう。「浄土房遁世の事」に始まり優れた遁世者の事例を挙げつつ巻十末の最後を「臨終の目出き人々の事」として見事に往生を遂げた僧侶の事例を示しつつ、『沙石集』全体を閉じる構成となっているのである。

#### 四、『沙石集』巻第四の構造と特色

すでに述べたように『沙石集』は当初五巻であったものが、十巻へ増補され、また長年に亘る改訂作業を経た結果、同じような内容の説話が巻を超えて収録されていたり、無任の主張が繰り返されていたりする部分も少なくない。説話集という史料の性格もあるが、繰り返して説き示される内容に、むしろ無任の強調したい考えが込められていたとみることもできるだろう。巻第十に見られる往生に関する発心・遁世譚、あるいは臨終の妄念については、巻第四にも収録されている。たとえば巻第四の五「臨終に執心畏るべき事」では「かかかる浮き世に、長らへてもよしなく」思った小原の上人が、「頸をくくりて、臨終せん」と同法の僧侶二・三人と三七日の無言行をまず行い、最後は七日の別時念仏を始めた所、「京中の道俗男女、聞き及ぶに随ひて、結縁せんとて集」まる次第であった。同法の一人が「人の心は定まり無き事なれば、若し妄執もとどまり、また、思し食す事も有らば、仰せられ、御心に残ることなくして、御臨終もあらんは、然るべしと覚え侍



り。」と無言行を止めるよう促したところ、当初「勇猛」であった心も、今は「ゆるくして、急ぎ死なばやとも覚えぬぞ」という有様であった。結局この上人は在家法師の叱責に遭い「にがりて、心ならぬ行水し、房の前の榎の木に縄をかけて、頸をくびりて死」んでしまったのである。案の定、半年ほど後、怨霊となつて座主僧正にとりつき口惜しさを語るのであった。無住は、

実に妄念執心、忘れ難く、捨て難し。ただ思ひとどまるべかりけるに、よしなく名聞に耽りて、なまじひに頸くくりて、魔道に入りけること、詮無く覚ゆる。能く能く執心妄念をば、畏れ弁ふべきなり。この事は、知りたる小原の上人の、親子語りて、よく見たるとて、語りたりしかば、確かの事なり。<sup>30)</sup>

と結んでいる。

本条が自死往生の失敗談であるのと対照的に、続く巻四の六「入水したる上人の事」は成功した事例であると言える。ある山寺の上人は道心深く、浮世に心を留めず、急ぎ極楽へ参ろうと入水を思い立つが、「臨終一期の大事なり。し慣れたる事だにも誤りもあり、不覚もする事なり。往生の大事、臨終の作法、未だ得ざる事なれば、いかがおぼつかなし。それに付きては、水に入りて後も、妄念妄心ありて、命も惜しく、余念も交らば、往生も不定なれば」と、「水に入りて後、尚も生きいでたき事あらば、縄を引くべし。さあらば引き出だし給へ」と同行を語らつて入水を決行したのであった。二・三度慣らした後、見事往生を遂げたのである。無住は「実に、名聞我執の心にて往生すべからず。真実の信心にてこそ、素懐をも遂ぐべけれ。頸くくり

上人には似ずにこそ。能く能く慣らして、往生しける、賢くこそ覺ゆれ。」と高く評価しているのである。<sup>31)</sup>

このように巻四においても往生を遂げた事例と往生に失敗した事例をあわせて収録しており、巻十と同様、臨終時の心のありようへの関心が示され妄念妄心を絶つべきことが述べられているのである。これらの説話を含む米沢本巻第四は以下のような構成になっている。①無言上人の事、②上人の妻に後たる事、③上人子持ちたる事、④婦人臨終を障りたる事、⑤臨終に執心を畏るべき事、⑥入水したる上人の事、⑦道に入りなば執心を除くべき事、⑧上人の女に看病せられたる事、⑨上人の妻せよと人に勧めたる事、⑩上人の妻に殺さるる事、⑪遁世の上人風情の事、⑫道人の教戒の事。以上全十二条である。臨終の執心や遁世の勧めなど、巻十と密接に関連する説話が収録されているが、『沙石集』全体の構成、特に巻第四と巻第十の関連を考察する上で、以下では巻四の内容について検討しておきたい。

大隈和雄氏は『三国仏法伝通縁起』・『八宗綱要』・『元亨釈書』などが相次いで編纂されていった無住の時代を「日本の仏法の自覚と反省がはじまった時代で、日本の仏法を総体的に捉えようという関心がめばえ、仏法の歴史を考えることが具体化しはじめた時代であった。」<sup>32)</sup>と述べておられるが、すでによく知られているように、末代における大小・権実・顕密・禅教・聖道浄土の激しい対立は、無住にとっては我執・偏執に他ならなかつたのであり、最も批判されることであったのである。巻四の冒頭に示された「無言上人事」は、まさに我執に捕らわれた態度をとりながら、そのことに自らが気付かない僧侶たちの

話してであるが、偏執批判はそれに引き続いて述べられているのである。無住が「諸宗の教えの融和統合を主張し、一宗に偏執して、他宗を誹謗することは釈尊の意図に背く、ひとりよがり、思いがりの態度である<sup>33</sup>」とくり返し述べているのは確かである。しかしながら、諸宗の融和統合を説くためには、どうしても通仏教的な理論に頼るほかないことは明白である。たとえば「一代の教門、詮ずる所、戒・定・慧の三学に過ぎず<sup>34</sup>」あるいは、「凡そ仏法の大意は、諸悪莫作、衆善奉行、自浄其意、是諸仏教と云ひて、諸仏の通戒なり。諸悪莫作は戒、衆善奉行は定、自浄其意は慧なり。されば戒と雖も三学を含めり<sup>35</sup>。」と述べているように、戒・定・慧の三学や七仏通誠偈がその拠り所として示されているのであり、また「都て万行一門なり。心を得て行へば、何も隔て無し」と述べ、どの教えを学ぼうとも、到達するところは同じである故「是非偏執有るべからず」という主張をくり返し説き示しているのである<sup>36</sup>。

ただし「律宗の教えと修行が、仏法の基本であることを、よく認識しなければならぬ<sup>37</sup>」というのが無住自身の考えであったと大隈和雄氏は述べておられるものの、諸宗に共通する仏教の基本である戒律すら遵守できない僧侶が、まさに横行しているということ、これが無住の目の当たりにした当時の仏教界の動向であった点も否めない。とくに僧侶でありながら妻子を持つことが当時かなり一般化していたことが、巻第四ノ二「上人の妻に後れたる事」、同三「上人子持ちたる事」などの条から伺うことができる。「無言上人事」で戒律が基本と説きながら妻子を有する破戒の僧侶が後を絶たない現状をどう受け止め整

合性を図るのか、無住にとつては大きな問題であったと言えよう。巻四では妻子を設けることの功罪を示す事例がいくつか収録されている。たとえば同四に「婦人、臨終を障へたる事」として往生の失敗談をあげ、「妻子並み居、悲しみ泣き慕ふを見れば、下根の機、争か障りとならざるべき、実に出離を志さん人は菩提の山に入る道のほだしを捨て、煩惱の海を渡る舟のともづなを切るべきなり<sup>38</sup>。」と結んでいるのである。

またこれに続いてすでに引用した同五「臨終に執心を畏るべき事」、同六「入水したる上人の事」を配置し、そのあと同七「道に入りては執着を棄つべき事」として、『一言芳談』にも収録されている春乗房の言葉「秦太瓶一つなりとも、執心とどまらん物は棄つべしとこそ、心得て侍れ」から、執着への批判が展開され、無住が好んで用いている光明皇后の御筆で内裏の屏風に書かれていたとする「清貧は常に染濁福は常に憂ふ」という、「清貧の思想」を強調しつつ締めくくられている<sup>39</sup>。

ただし同八では話題を一転させ「上人を女看病したる事」として、年老いて中風となり弟子たちからも見捨てられてしまった山寺の別当が、実の娘の手厚い看病によって「心安く」往生を遂げた話<sup>40</sup>、同九「上人、妻せよと人に勧めたる事」として、同じく中風となった上人が、道行く出家者を見つけては「妻せよ」と説法した話<sup>41</sup>、さらに同十「上人の、妻に殺されたる事」として、老後の用心にと妻帯した老僧が妻に殺されかけた話しを載せ、僧侶として妻帯することについて「能く能く斟酌すべき事にや。」と結んでいるのである。その後同十

一「遁世人の風情を学ぶべき事」、同十二「道人の戒めの事」として名利への執着と捨てた遁世者を理想とすべきことが述べられ巻四を閉じているのである<sup>12)</sup>。

以上は十二帖本での構成であるが、巻第四について米沢本・梵舜本・神宮文庫本での条の構成は以下のようになっている<sup>13)</sup>。

米沢本巻第四

梵舜本巻第四

神宮文庫本巻第四

- |                 |                      |               |
|-----------------|----------------------|---------------|
| ①無言上人の事         | ①無言上人                | ①無言上人         |
| ②上人の妻に後れたる事     | ②上人妻ニ後タル事            | ②上人妻ニ後タル事     |
| ③聖の子持てる事        | ③上人子持タル事             | ③上人子持事        |
| ④婦人、臨終を障へたる事    | ④上人ノ看病シタル事           | ④妻臨終障之事       |
| ⑤臨終に執心を畏るべき事    | ⑤上人ノ妻セヨト人ニ勸タル事       | ⑤首縊上人之事       |
| ⑥入水したる上人の事      | ⑥婦人ノ臨終ノ障タル事          | ⑥入水上人         |
| ⑦道に入りては執着を棄つべき  | ⑦道人ノ臨終ノ障タル事          | ⑦道心可捨執着事(⑪含む) |
| ⑧上人を女看病したる事     | ⑧上人ノ妻ニコロサレムトシタル事     |               |
| ⑨上人、妻せよと人に勧めたる事 | ⑨上人ノ妻セヨト人ニ勸タル事       | ⑨妻臨終障之事       |
| ⑩上人の、妻に殺されたる事   | ⑩臨終ニ執心ヲソルベキ事         | ⑩首縊上人之事       |
| ⑪遁世人の風情を学ぶべき事   | ⑪道心タラム人執心ノゾクベキ事(⑪含む) |               |
| ⑫道人の戒めの事        |                      |               |

三本とも「無言上人事」は同じであるが、以下米沢本では僧侶の妻帯に関する条(②・③・④・⑧・⑨・⑩)と臨終の妄念に関する条(⑤・⑥・⑦)が混在した形となっているのに対して、梵舜本ではそれが整理されており(③⑧⑨④⑩に続いて⑤⑥を配置)、また神宮文庫本は米沢本・梵舜本に共通する⑨を欠いているが、梵舜本の構成を踏襲していることが窺える。とくに臨終に執心を断つべきであるとする内容(⑤・⑥・⑦)が梵舜本・神宮文庫本では巻の後半にまとめられたことにより、米沢本にみられた混在感が払拭された構成となっていることが指摘できよう。また巻四全体としては一宗へ偏執することへの批判、および臨終の妄執への批判というように「執心・執着」に警戒することを述べる内容となっているように考えられよう。

### 五、『沙石集』の構造と無住の思想

『沙石集』全体を通じて発心・往生に関する特徴的な説話が収録されている巻第四・第十を中心にその構成と内容を検討してきた。冒頭で述べたように『沙石集』の現存諸本はいろいろな系統に分類され、特に巻六以降の説話配列において異同が著しいが、本論で引用した条(巻第十の十「妄執に依りて魔道に落つる人の事」・巻第十の一「浄土房遁世の事」・巻四の五「臨終に執心畏るべき事」・巻四の六「入水したる上人の事」)は、古本系の十巻十二帖本と十巻十帖本および流布本系すべての本に共通して収録されている。つまり本文自体の加筆修正は行われてはいるものの、条自体には大幅な変更や削除がなされ

なかつたものばかりであり、その意味で『沙石集』編纂当初から無住晩年に至るまで、大きく変化することのなかつた無住の思想の根幹をなすものであったと見ることが出来るだろう。またこれらの条では臨終正念が重視され「臨終目出度く」終わるために、日ごろから妄念・執心を振り払うことに関心が寄せられていることが窺えよう。その意味で、巻第四で展開した偏執批判を中心とする往生関連説話をさらに増補して巻第十を構成し、臨終のあるべき姿、理想とすべき遁世のありようを説き示そうとしたと考えられるように思われる。

ただし「臨終知り難きもの」と記されているように、往生は並大抵のことでは遂げることができないというのもまた無住の実感であつたといえ、そのためには日ごろから名利への執着を断ち切り、臨終に備えていく必要があつたのである。巻第四の六の「入水上人」を「頸くくり上人には似ずにこそ。能く能く慣らして、往生しける、賢くこそ覚ゆれ。」と評価しており、また巻第十本ノ九に「聖衆来迎の儀式、臨終の作法など、年久しく馴らして、思ひの如く、臨終せし時も、来迎の儀にて、終りめでたかりける。是を迎講の始めと云へり。」<sup>44</sup>として丹後国で始められた「迎講の事」を収録しているのは、まさに「能く馴らすべきは、臨終正念の大事なり。」という強い思いがあつたからだと考えられる。その意味では、いくら宿善を開発し、善知識に出会い、心を改めたとしても、十悪五逆の罪人が往生を遂げるのは極めて異例のことであるというのが、無住の考えであつたと言えるのである。そして無住は、仏法の道理を弁え、平生から心を鍛錬して（能く能く慣らして）臨終を迎えていった「終りめでたかりける」

人々の事例を揚げつつ『沙石集』全体閉じていたのであろう。

それではこのような無住の思想は鎌倉時代全体の中でどのように位置づけられるのであろうか。あらためて言うまでもなく、日本における浄土教の発展は、恵心僧都源信の『往生要集』が広く受容されていたことによるが、その特色は四種三昧のうち常行三昧の実践として比叡山に定着していった念仏思想が、所依の浄土經典に説かれているように五逆罪を犯した者でも往生できるという思想を広めていったこと、「臨終正念、勝百年業」と示されているように、臨終の正念が重視されていくようになったこと、この二点にあると言える。前者についてはたとえば『三宝絵』巻下「比叡不断念仏」にも、念仏が身・口・意三業の罪障消滅のための実践であることが説かれ「一度ソノ名ヲ唱レバ、音ヲアグルホドニ八十億劫ノ生死ノ罪ヲケシ、忽ニソノ国ニムマルレバ、臂ヲノブルアヒダニ二十万億ノサカヒヲコエヌ。」と『観無量寿経』や『阿弥陀経』の所説が示され、さらに「五逆ノオモキ罪オモ、タノメバ、即生レヌ。」<sup>45</sup>と結んでいるのである。『往生要集』撰述当初から主要浄土經典の滅罪思想は注目されていたのであり、それは『日本往生極楽記』序において『瑞応伝』<sup>46</sup>を引用し、牛を屠り鶏を販ぐ者の往生を明記した慶滋保胤を中心とする二十五三昧会結衆の期待するところでもあつたと言えよう。また『大日本国法華経験記』巻中には「牛鳥の死骸の肉」を食物としながら、沐浴して『法華経』を誦し念仏のうちに見事往生を遂げた浄尊法師の事例など、いわゆる破戒者の往生譚が登場してくるようになり、平安時代終わりには「弥陀の誓ひぞ頼もしき、十悪五逆の人なれど、一度御名を称ふれば、



来迎接疑はず<sup>48</sup>」と今様にも詠まれ、また「心極テ猛クシテ、殺生ヲ以業ス。日夜朝暮ニ、山野ニ行テ鹿・鳥ヲ狩リ、河海ニ臨テ魚ヲ捕ル亦、人ノ類ヲ切り、足手ヲ不折ヌ日ハ少クソ有ケル。」<sup>49</sup>という有様の讃岐国多度郡の源大夫が、法会の講師の教えを受け一念発起して出家し、見事往生の証を得たという「悪から善への回転を物語化した屈指の傑作<sup>50</sup>」を生むに至ったのである。つまり仏教の戒律、特に殺生戒に背き、十悪五逆を犯す破戒の人間を「悪人・罪人」と捉えるならば、その往生が可能であるという考え方は、平安末期の貴族社会ではすでに常識となっていたことができるだろう。その意味で「心を改めて、十念をも唱へ、宿善開發して、誠の往生もあるべし。」と説く無住の思想は、この時代の思潮となんら抵触するものではなかったといふことができるだろう。また後者については、臨終正念を妨げるものとして最も憂慮されていたのがこの世での名利への執着だったのであり、平安時代末期の各種往生伝や『発心集』や『撰集抄』などを始め、この時期に作られた発心・往生譚の基調をなしていると言えよう。「妄念妄心・名聞我執」があれば往生の素懐を遂げることは容易ではなく、「真実の信心」を起すべきことをくり返し述べている無住の思想は、その意味で、平安時代末期から形成されていったものといふことができるだろう<sup>51</sup>。これら二点を踏まえて注意したいのは、本論で述べてきたように、往生は並大抵のことでは遂げることができないといふのが無住の実感であったといえ、そのためには日ごろから名利への執着を断ち切り、臨終の正念成就に備えていく必要があったといふことと、それが「目出度き往生」を迎えるという無住の理想をかなえ

るものだったといふことである。無住はまさに「臨終目出度き事」を切望してやまなかったのである。

ところで臨終正念を重視する無住の立場は、たとえば「臨終正念ナルガユヘニ、来迎シタマフニハアラス。来迎シタマフガユヘニ臨終正念ナリトイフ義アキラカナリ。」<sup>52</sup>と明言する法然などとまったく異なることはいうまでもない。しかしながら法然の説法を間近で聴聞していた信者でさえ、無住と同じように、やはり臨終際の有様は気になっていたようである。たとえば法然は「往生浄土用心」でつぎのように記している。

やまひもせでしに候人も、うるはしくおはる時には、断末魔のくるしみて、八万の塵勞門より、无量のやまひ身をせめ候事、百千のほこ・つるぎにて、身をきりさくがごとし。(中略)これは人間の八苦のうちの死苦にて候へば、本願信じて往生ねがひ候はん行者も、この苦はのがれずして、悶絶し候とも、いきのたえん時は、阿弥陀ほとけのちからにて、正念になりて往生をし候べし。臨終はかみすぢきるがほどの事にて候へば、よそにて凡夫さだめがたく候。ただ仏と行者との心にてしるべく候也。<sup>53</sup>

このように、病もなく「うるはしくおはる時」、つまり目出度き臨終を迎える時であっても断末魔の苦痛があり、たとえ悶絶して死ぬことになったとしても、まさに息の絶える時、正念に住して往生するといふことである。法然はさらに『阿弥陀経』の記述を引用して、阿弥陀仏の来迎を目の当たりにすることにより、心顛倒することなく往生できるという論拠を明示しているが、臨終の有様は人それぞれであつ

て、必ずしも思うようにならないことをくり返し述べている。

ただし人の死の縁は、かねておもふにもかなひ候はず、にはかにおぼち・みちにておはる事も候。また大小便利のところにてする人も候。前業のがれがたくて、たちかたなにていのちをうしなひ、火にやけ、水におぼれて、いのちをほろぼすたぐひおほく候へば、さようにてしに候とも、日ごろの念仏申て極楽へまいる心だにも候人ならば、いきのたえん時に、阿弥陀・観音・勢至、きたりむかへ給べしと信じおぼしめすべきにて候也。<sup>54</sup>

このように、往生したかどうかを臨終時の有様（善し悪し）で判断しようとし、「目出たき臨終」を迎えようとする無住の立場とはまったく異なり、願い通りにならないのが人の臨終である点をまず押さえつつ、たとえ臨終は悪しくとも往生は可能というのが法然の立場であったと言えよう。臨終時に正念が獲得できるかどうか、また往生の善し悪しが議論されている当時の仏教界の動向を踏まえた上で法然の考えを見るならば、臨終の善し悪しに関係なく往生は可能ということ、換言すればたとえ悶絶して死んでも平生の念仏で弥陀は来迎し往生はできるという立場が鮮明に示されていると言え、無住を始めとする頭密の僧侶の立場との違いは一目瞭然であろう。

総じて法然や親鸞は弥陀の本願力にすべて任せきろうという考え方に特色があると言えるが、一遍に到っては、「心は妄心なれば虚妄なり。たのむべからず<sup>55</sup>」として妄執・妄念を離れるための努力を勧める無住とは対照的な立場を貫いている。「凡夫のこころには決定なし。決定は名号なり。しかれば決定往生の信たらずとも、口にまかせて称せば

往生すべし。」<sup>56</sup>と述べているように、名号自体の価値を絶対化しているのである。しかしながら、弥陀の本願への絶対的な信がどの程度まで人々に理解され浸透していったかは判然としない面がある。一遍は「出る息、入る息をまたざる故に、当体の一念を臨終とさだむるなり。しかれば念々臨終なり。念々往生なり。」<sup>57</sup>と述べている。今この一瞬を臨終ととらえ念仏し続けていく。目出度き往生を期待しても現実はずしとも思うようにはならないという往生をめぐる論議の行き着いた果ての結論であったと見ることもできるだろう。

## 六、結びにかえて

本論文では無住の往生思想に着目し、関連する説話が多く収録されている巻四ならびに巻十（流布本系の巻九・巻十）について、『沙石集』の改訂過程を踏まえつつ検討を加えてきた。冒頭に引用した神宮文庫本巻九の十の記載によって確認したように、悪人の往生についてでさえ、具体的には十悪五逆の罪人が穏やかな臨終を迎え「臨終好し」と判断されたことが往生の証となっていたことが窺え、無住自身、往生の得否は臨終の善し悪しで決定すると思え注目していたことが指摘できよう。そして『沙石集』の末部には「穏やかな死」つまり目出度き往生を迎えた人々の事例を書き連ねて全体を閉じていたのである。しかしながら、そのような臨終を迎える（＝往生する）ためにはどのようにすればよいのか。すでに指摘したようにいくつかの要件を満たしていない悪人の往生など、無住は認めていないのであるが、では

立派な行業を積み重ねてきた僧侶でさえ「すさまじげなる顔ざし」で死んでいく実情はどのように説明することができるのか。無住は臨終時の妄執・妄念がそのような死を迎えさせると考えていたようだが、その妄執・妄念は卷十（流布本系の卷九）の十「某の宰相」のように「心の内ばかり、人知れず」に起こってくるのであり、まさに「人の臨終は知り難き物」というのが実感であったと言えよう。

従って、穏やかな死（目出度き往生）を迎えるためには日ごろから妄執・妄念を断じておく努力が必要だったのであり、無住の仏法觀の基調とも言える一つの宗派に固執して他を誹謗する態度など、最も誠めることがらであったのである。卷四の冒頭「無言上人の事」における偏執批判の主張が、臨終の妄執と関連していくことは卷四に収録されている説話内容から窺うことができるだろう。そして、そのような執着を離れるために留意すべき事柄は、臨終に備えて、平生から十二分に心の準備をしておくことであつたのである。卷四の「入水したる上人の事」や、卷十「迎講の事」は、「能く馴らすべきは、臨終正念の大事なり」ということを示すために配置されていると考えることができるだろう。死後救済の論理よりも、きわめて不定な臨終をいかに目出度く終わることができるのか、無住はまさに現実の問題を見据え続けていたのである。

〔注〕

- (1) 小島孝之氏校注・訳『新編日本古典文学全集』52『沙石集』（小学館、二〇〇一年）五六四頁。  
(2) 平雅行氏『親鸞とその時代』（法蔵館、二〇〇一年）尚、『沙石集』の

中で無住が悪人として考えていたのは、十悪五逆といった仏教の戒律を破った人間であつたことがいくつかの用例から窺える。また『平家物語』卷十「戒文」に登場する平重衡のように、物語や説話で語られる悪人とはこのような概念であつたと考えることができるだろう。物語や説話が読み手や聞き手を想定していることから、そのような悪人の理解のされ方が鎌倉の一般的な認識であつたと考えて差し支えないであろう。

- (3) 「黒田の聖人へつかわす御消息」（『日本思想大系』10『法然・一遍』岩波書店、一九七一年・一九九頁）。尚、法然の戒律觀については、今井雅晴氏『鎌倉新仏教の研究』第一章「法然の戒觀と浄土宗の展開」（吉川弘文館、一九九一年）参照。  
(4) 大隈和雄氏『中世 歴史と文学のあいだ』（吉川弘文館、一九九三年）、安田孝子氏『説話文学の研究 撰集抄・唐物語・沙石集』（和泉書院、一九九七年）、小島孝之氏『中世説話集の形成』（若草書房、一九九九年）、片岡了氏『沙石集の構造』（法蔵館、二〇〇一年）など。  
(5) 大隈和雄氏『信心の世界、遁世者の心—日本の中世2』（中央公論新社、二〇〇二年）  
(6) 同前書四七頁〜四八頁。  
(7)・(8) 前掲注(1)同書二十頁。  
(9) 大隈和雄氏前掲注(4)同書、一二六頁。  
(10) 神宮文庫所蔵『沙石集』卷第四末（二十七丁ウ）  
(11) 渡辺綱也氏校注『日本古典文学大系』85『沙石集』（岩波書店、一九六六年）解説参照。  
(12)・(13) 前掲注(1)同書、解説参照。  
(14) 大隈和雄氏前掲注(5)同書、一〇〇頁。  
(15) 神宮文庫所蔵『沙石集』卷第九（十四丁オ）  
(16)・(17) 前掲注(1)同書五六二頁〜五六三頁。  
(18)・(19) 同前書五六四頁〜五六六頁。  
(20) 同前書五一三頁〜五一四頁。

- (21) 同前書五一五頁～五一七頁。  
 (22) 同前書五一八頁～五二二頁。  
 (23) 同前書五二二頁。  
 (24) 同前書五二八頁。  
 (25) 同前書五三八頁。  
 (26) 同前書五二二頁。  
 (27) 同前書五五九頁。  
 (28) 同前書五七三頁。無住の思想について小島孝之氏は、巻第十末ノ十二中に「凡そ世間出世の、格を越えて格に当たるに、当たらずと云ふ事なし。」(五九一頁。)に着目され、特に巻六以降について「無住の意図としては、最終的には「格を超えて格に当る」という禅の考え方を称揚することにあると思われる。」と述べておられる(前掲注(一)同書、解説参照)。無住の思想を検討する上で本条は重要であるが、私にはやはり『沙石集』全編を通して、様々な思想を引用しながら獲得されている無住の根本の思想に注目する必要があるように思われる。なお、この点については別稿を予定している。
- (29) ただし、神宮文庫本の巻九には落丁が見られ、「浄土房遁世事」の冒頭部分の記述が欠落している。  
 (30) 前掲注(一)同書一九五頁～一九七頁。  
 (31) 同前書一九七頁～一九八頁。  
 (32) 大隈和雄氏前掲注(5)同書、二三五頁。  
 (33) 同前書二四〇頁。  
 (34) 前掲注(一)同書一七九頁。  
 (35) 同前書一八二頁。  
 (36) 同前書一八七頁。  
 (37) 大隈和雄氏前掲注(5)同書、二三七頁。  
 (38) 前掲注(一)同書一九五頁。  
 (39) 同前書二〇四頁。  
 (40) 同前書二〇四頁～二〇六頁。  
 (41) 同前書二〇六頁～二〇七頁。  
 (42) 同前書二〇七頁～二〇九頁。
- (43) ただし、②は梵瞬本のみなし。⑨は米沢本・梵瞬本のみあり。神宮文庫本の⑤の内容は「臨終ニ執心ヲソルベキ事」と同じ。また本稿で引用している巻十の「浄土房遁世事」「妄執によりて魔道に落たる事」「臨終目出き人々の事」は米沢本・梵瞬本・神宮文庫本いずれにも収録されており、大幅な改訂はなされていないことが窺える。  
 (44) 前掲注(一)同書五五九～五六一頁。  
 (45) 『新日本古典文学大系』31『三宝絵 注好選』(岩波書店 一九九七年)二〇七頁。  
 (46) 『日本思想体系』7『往生伝 法華験記』(岩波書店 一九七一年)十一頁。  
 (47) 同前書一四二頁～一四四頁。  
 (48) 『日本古典文学大系』73『和漢朗詠集 梁塵秘抄』(岩波書店 一九六五年)三八六頁。  
 (49) 『新日本古典文学大系』36『今昔物語集』四(岩波書店 一九九七年)巻第十九第十四話、一五三ページ～一五九頁。  
 (50) 同前書一〇〇頁。  
 (51) 拙稿「『厭離穢土』考―撰関期浄土教をめぐる諸問題」(伊藤唯真編『日本仏教の形成と展開』法蔵館 二〇〇二年)、「平安後期浄土教の一考察」(佛教大学『文学部論集』第88号 二〇〇四年)、「平安浄土教の一考察―発菩提心をめぐって」(高橋弘次先生古希記念論文集『浄土学仏教学論叢』山喜房佛書林 二〇〇四年)参照。  
 (52) 『西方指南抄』所収  
 (53) 『日本思想体系』10『法然 一遍』(岩波書店 一九七一年)二二二頁。  
 (54) 同前書二二二頁。  
 (55) 同前書三二九頁。  
 (56) 同前書三二八頁。  
 (57) 同前書三三四頁。

(ささだ きょうしゅう 文学部教授)

二〇〇八年十月十四日受理